スノリにおけるニーベルンゲン伝説

石 川 栄 作

Die Nibelungensage bei Snorri Sturluson

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

Snorri Sturluson (1179-1241) gehörte zu den einflussreichsten Politikern und auch zugleich zu den hervorragendsten Gelehrten im isländischen Freistaat. Er verfasste neben der großen Königssaga 》Heimskringla《 gegen 1222-25 die 》Prosa-Edda《, ein dreibändiges Lehrbuch für die damals Skalden genannten norwegisch-isländischen Dichter. Darin sind die Beschreibungen von der Nibelungensage zu lesen. In der vorliegenden Arbeit soll die Nibelungensage in der 》Snorra-Edda《 vorgestellt und untersucht werden, um deren Eigentümlichkeit im Vergleich mit der 》älteren Edda《 und der 》Völsungasaga《 klarzumachen.

Die Eigenheit von Snorri Sturluson besteht darin, die nordische Heldensage überliefernd, die spezielle Ausdrucksweise der damaligen Dichtkunst 〉Kenning〈 zu erklären. Im 39. Kapitel des zweiten Bandes erläutert er, warum das Gold 〉Otterbuße〈 oder 〉Notbuße der Asen〈 oder 〉Zankerz〈 genannt wird, indem er die Geschichte von den Asen Odin, Loki und Hönir erzählt. Was er darin schildert, ist fast die gleiche Beschreibung wie die in der 》älteren Edda《 und der 》Völsungasaga《.

Snorri erzählt auch im 40. Kapitel die weitere Geschichte von dem Gold und erklärt, warum das Gold 〉Fafnirs Höhle oder Bau〈 genannt wird, oder 〉das Erz der Gnitaheide〈 oder 〉Granis Bürde〈. Hier wird die fast gleiche Episode Sigurds entwickelt, wie sie in der 》älteren Edda《 und der 》Völsungasaga《 geschildert wird.

Im 41. Kapitel entwickelt Snorri die Geschichte vom Nibelungengeschlecht zur Erklärung der 〉Kenning〈, warum das Gold 〉der Nibelunge Schatz〈 oder 〉-Erbe〈 genannt wird. Die Nibelungen bedeuten bei Snorri Sturluson das Geschlecht von Gjuki. Snorris Beschreibung

von den Gjukungen ist, obgleich oberflächlich, fast identisch mit der in der 》älteren Edda《 und der 》Völsungasaga《. Danach stellt er weiter die Geschichte von den Nibelungennachkommen dar, wobei er die 6 wertvollen Gedichte vom Skalden Bragi zitiert.

Daraus ergibt sich, dass die Nibelungensage bei Snorri Sturluson eine enge Beziehung mit den Nibelungenüberlieferungen in der 》älteren Edda《 und der 》Völsungasaga《 hat. Die gemeinsamen Stoffe sind vielleicht bei Snorri Sturluson in der zwanziger Jahren des 13. Jahrhunderts vorhanden gewesen, bevor die Codex Regius genannte Handschrift der 》älteren Edda《 gegen 1270 geschrieben und die 》Völsungasaga《 als Prosa gegen 1260 zusammengestellt wird.

I. スノリ・ストルルソンの生涯と作品

スノリ・ストルルソン(Snorri Sturluson, 1179-1241)はアイスランド共和国で最も有力な政治家の一人であり、同時に優れた歴史家・詩人でもあった。彼は「王家のサガ」の最大長篇『ヘイムスクリングラ』(Heimskringla)のほかに1222-25年頃には『散文エッダ』(Prosa-Edda)をも書いている。本稿は『散文エッダ』あるいは『新エッダ』(Die jüngere Edda)とも呼ばれているこの『スノリのエッダ』(Snorra-Edda)におけるニーベルンゲン伝説を紹介し、その特質を探り出すことを主たる目的とするものであるが、その前にスノリの生涯と作品を概観しておくのも決して無駄ではあるまい[1)]。

スノリ・ストルルソン――「ストルラ(Sturla)の息子スノリ」という意味――の先祖は最初はそれほど有力ではなかったが、祖父(トルド)が有名なスノリ・ゴジ[2)]の孫娘と結婚してから頭角をあらわし、父ストルラがボルグ屋敷の娘(グドニィ)を娶るに及んで、アイスランドで有力な一族となった。父は知謀に優れて、事にあたっては果断でもあったから、近隣の首領と争っても敗れることはなかった。ところが、晩年にレイキャホルト(Reykjaholt)の神父ポールと遺産

1) 以下、スノリの生涯と作品を概観するにあたっては、次の文献に拠るところが多いことを付記しておく。
山室静：北欧文学の世界　東海大学出版会1969年
山室静：北欧文学ノート　東海大学出版会1980年
山室静：サガとエッダの世界 ――アイスランドの歴史と文化――　社会思想社 1982年

2) ゴジとは神官兼首領とも言うべきもので、神殿を営みうる有力な首領を指した。(山室静：北欧文学ノート 131頁及び山室静：サガとエッダの世界 52頁参照)

相続をめぐって争ったときには、有力なオッディ(Oddi)の首領ヨーン・ロプトソン(Jon Loptsson)がポール側に加担したため、裁判に負けてしまった。しかし、オッディの首領ヨーンは敵にまわしてはうるさいストルラの機嫌を取るために、その末子スノリを引き取って養育することを申し出た。これは大変に名誉なことであったから、ストルラも喜んでこれに応じ、スノリは3歳でオッディの首領に引き取られることになったのである。父ストルラが1183年に死ぬと、二人の兄トルドとシグヴァトは財産を分けてもらって独立したが、スノリはまだ幼かったため、依然としてオッディの養父のもとで養育された。

オッディはフランスに留学した学者セームンド(Sæmundr Sigfússon, 1056-1133) の開いたところで、アイスランドの学芸の中心地でもあり、またその孫に当たるヨーンは当時有力な首領だったこともあって、当然各地から多くの詩人や首領たちがそこを訪れた。スノリの学者あるいは政治家としての教養はほとんどそこで培われたと言ってもよいだろう。スノリは1199年に裕福なボルグ屋敷の娘ヘルディスと結婚してからもなお4年ほどオッディで過ごしている。1202年にボルグ屋敷の首領ベルシが死ぬと、スノリは妻とともにボルグ屋敷に移ってそこの主人となった。二人の間には娘ハルベラと息子ヨーンが生まれたが、妻ヘルディスは夫の飽くなき名誉心と財産欲に恐れをなしたためか、夫婦関係はうまくいかずに数年後に二人は別居。1206年頃スノリはレイキャホルトの屋敷に移った。ここはスノリの父と神父ポールが以前に争った屋敷で、当時はポールの子マグヌス神父が管理していたが、スノリは巧みにこの屋敷に入り、老神父亡きのちに、それを自分の所有としたのであった。レイキャホルトはこのスノリの支配のもとでたちまちのうちに富み栄えていったという。

スノリが並大抵の人物でないことは、1215年に「法の宣言者」(Gesetzessprecher)[3] に選出されたことでも明らかであろう。もっともこれにはオッディ家の後押しによるところが大きかったとも言われているが、しかし30代でこの名誉ある地位に就いたことは、いかにスノリが声望を持っていたかを示すものである。

この「法の宣言者」の任期（3年）を務め上げたスノリは、1218年にノルウェーを訪問した。スノリは当時14歳だったホーコン・ホーコナルソン王(Hákon Hákonarson, 1217-63)と摂政スクーレ伯(Skúli)に会った。特にスクーレ伯に歓

3）アイスランドの議会である「アルシング」において口承で伝えられた憲法を朗誦し、議長として法の制定や裁判を司るのを役目とした。(山室静：北欧文学ノート138頁)

待されて、その冬を彼の館で過ごした。その後スノリはスウェーデンとノルウェーの各地を旅して見聞を広め、翌年の冬もスクーレ伯の客となった。スクーレ伯はそのとき10歳の娘（マルガレーテ）をホーコン王と婚約させて国の実権を握っていた。このスクーレ伯の後押しもあってスノリはホーコン王から「円卓の友」の地位を授けられたが、これは外国人に与えられる最高の地位であった。さらにスノリは1220年春にはホーコン王よりアイスランドの総督に任命されることになるが、それがやがてスノリの命取りとなるのである。すなわち、その頃一つの事件がきっかけとなってノルウェーとアイスランドの間は険悪になっていたが、スノリはその調停役としてアイスランドへ帰って行くものの、アイスランドをノルウェー王の統治下に入れる努力はしなかったので、それがホーコン王には大きな不満であり、やがて二人の間に大きな亀裂が生じる結果となるのである。

スノリはとにかくその調停役として1220年秋にアイスランドへ戻って、人質として長男ヨーンをノルウェーに送った。スノリはノルウェー王からアイスランドの総督に任命されていたことで、最初は多くの島民から不信を買っていたが、その調停役も果たして、信用を徐々に回復し、1222年には再度「法の宣言者」に選ばれた。さらにスノリは巧みな政略結婚によって自分の立場を強化することに努める。すなわち、長女ハルベラはすでに北区の首領コルベイン(Kolbeinn)に嫁いでいたが、今度は次女インゲビョルグをハウク谷のギツール家(Gizurr)の嫁とすることで、その名家を味方に引き入れたばかりか、スノリ自らもギツールの亡兄の未亡人で、当時最大の財産所有者とも言われたハルヴェイグ(Hallveig)に近づき、やがては彼女を事実上の妻とするのである。スノリはたちまちアイスランドきっての富裕な首領となり、1231年に至るまで「法の宣言者」をも務め続けた。恐らくこの頃が彼の最も得意な時代であったろう。

しかし1233年頃からスノリの運命も急速に傾き始める。彼の飽くなき財産欲が裏目に出て、まずは近親から裏切られることになるのである。すなわち、人質となっていた長男ヨーンが成人してノルウェーから戻って財産を要求したところ、スノリはそれを拒否した。失望したヨーンはノルウェーに舞い戻って自堕落な生活を送るうちに、酒の上の喧嘩で刺し殺され、それがきっかけとなってスノリとハウク谷のギツール家との間に亀裂が生じる。ギツールは妻を離縁してスノリのもとに送り返して、以後はきっぱりと敵側にまわるのである。続いて争い好きの次男ウレキャが、ローマへ巡礼中で不在の従兄弟ストルラの財産を狙って、その地盤である北区に争いを巻き起こしたため、スノリ（ウレキャの父）とその兄シグヴァト(Sighvatr、ストルラの父）の間も険悪化した。こ

うした中でストルラが1235年に帰国するのであるが、彼は途中ノルウェー王の客人となった際に、ホーコン王よりスノリをはじめ首領たちを捕らえて、王のもとに送り届けるよう命じられていたのである。ストルラは兵を集めて、ウレキャをはじめ、スノリに荷担したトルレイフなどを捕らえてノルウェーに送った。戦線を離脱していたスノリも、盟友を見捨てるわけにはいかず、隠れ家を出て一緒にノルウェーへ送られた。

こうしてスノリは1237年に再度ノルウェーに渡るのであるが、この二度目のノルウェー行きはまことに惨めなものであった。半ば捕虜としてホーコン王の前で不服従の釈明をしなければならなかった。さらにこれまでスノリを庇護してくれていたスクーレ伯は、今や権勢欲の強い王に成人したホーコン王のもとで権力を失い、王の一臣下の身分におとしめられていた。スノリはスクーレ伯の息子ペーテルの館に身を寄せていたが、突然思いもかけぬ知らせが届いた。アイスランドを完全に制覇する直前にあったシグヴァト父子が1238年ギツールとコルベインの反撃にあって倒れてしまったのである。敵対関係にあったとはいえ、この兄一家の悲劇はスノリに大きな衝撃を与えたが、同時にこれを自分の地位回復の絶好のチャンスと見て、急遽帰国することを考え始めた。スノリはスクーレ伯に相談すると、ホーコン王へ反旗をひるがえす機会を窺っていたスクーレ伯は、自分の挙兵が成功したらスノリを正式にアイスランドの総督にすることを約束して、一艘の大船をスノリに贈った。スノリは帰国の準備に取りかかったが、それを知ったホーコン王は許さなかった。しかしスノリはその王命を無視して船を出した。1239年アイスランドに帰ったスノリはたやすくその領地と勢力の大半を回復した。

ホーコン王はこのスノリの王命無視を怒って処罰を考えていたが、スクーレ伯の動きも気になってしばらくは手控えていた。スクーレ伯がやがて挙兵して、勝敗を繰り返したのちについに倒れてしまうと、ホーコン王はもはや誰をも恐れる必要はなく、アイスランドのハウク谷のギツールに密書を送って、スノリ暗殺を命令した。狡智に長けたギツールは、スノリを巧みに呼び出して倒そうとするが、スノリは危うく難を逃れた。しかし、スノリにはまたもや思いがけないことが起こった。財産を共有してきた妻ハルヴェイグが急逝して、その前夫の二人の遺児（クレングとオルム）との間に財産分配の争いが生じたのである。スノリの処置に不満だった遺児たちは叔父のギツールに訴えたところ、ギツールはスノリ打倒の絶好の機会だと思い、盟友コルベインらにホーコン王の密書を見せて、スノリの家を襲うことにした。ただその際、二人の遺児のうち弟のオルムは、スノリに育てられた恩義からこの襲撃に加わることを拒否した。

まもなくスノリが受け取ったルーネ文字の手紙は、恐らくそのオルムからのもので、襲撃を警戒するように伝えてきたものと推定されるが、ルーネ文字がよく書かれていなかったのか、またはスノリが読み間違えたかで、スノリはそれをあまり気にとめなかったらしい。こうしてスノリは1241年9月22日の夜、レイキャホルトの屋敷でギツール軍に襲撃されて、地下の秘密の部屋に身を潜めたものの、やがて発見されて暗殺されてしまうのである。

こうしてアイスランド随一の政治家で学者でもあったスノリは、あっけなく命を断たれたのであるが、公私ともに多忙な生活の中でスノリはどのようにして長編の作品を書き上げることができたのかについては、まことに驚くべきものがある。アイスランドの学芸の中心地であったオッディでの幼年時代がのちのスノリの学者としての基盤に大いに役立ったことは確かであるが、実際に大作の執筆に着手したのは最初のノルウェー訪問からアイスランドへ帰国した頃からであろう。

まず1220年秋に帰国してやがて書き上げたのが『韻律一覧』(Strophenverzeichnis)である。これは全部で 102連の詩を収録して、ホーコン王とスクーレ伯の功績を称えながら、詩形の見本を示したもので、現在の『スノリのエッダ』第三部に当たるものである。『スノリのエッダ』第一部と第二部は恐らくこれに続けて書き継がれたものである。第一部「ギルヴィのまどわし」(Gylfis Betörung)は、古詩を数多く引用しながら、神々の住居アスガルトを訪ねたギルヴィ王と神々との対話という形で書き上げた小説風の物語で、いわば北欧神話を概観したものである。第二部「詩人の語法」(Die Dichtersprache)はそれまでの著名なスカルド詩人の388篇の詩を断片ながら随所に引用して、北欧詩人の独特な手法、いわゆるケンニング(Kenning)[4] を説明したものである。これらのケンニングは主に北欧の神話や伝説の幅広い知識を必要とするので、第一部で説きもらした神話・伝説をここで補説する結果となった。これに第三部「韻律一覧」を加えると、『スノリのエッダ』はまずは北欧神話を概観したあと、次には難解なケンニングを解説し、最後に自らの詩を用いて詩作の見本を示すという三部構成をなして、当時の若いスカルド詩人たちにとってはみごとな詩学書となっているのである。

この『スノリのエッダ』は1222-25年頃に書き上げられたと推定される[5] が、

4）古代北欧詩人の独特な語法で、一つの名詞を複数の単語で婉曲に表現する隠喩的用法。

5）谷口幸男訳：前掲書 304頁参照。

それに続けてスノリは恐らく『エギルのサガ』(Saga von Egill Skallagrimsson)を書いた[6]とされ、さらに現在『ヘイムスクリングラ』(Heimskringla)の中で大半を占めている『聖オーラブ王のサガ』(Saga von Olaf dem Heiligen)を独立のサガとして完成させたあと、その前後にノルウェー歴代の国王の事蹟を列伝体に書き加えて「ノルウェー王朝史」とも言うべき『ヘイムスクリングラ』(Weltkreis「大地の環」の意味) にまとめ上げたのだと考えられる。ただこの大作『ヘイムスクリングラ』の完成には、1220年頃からレイキャホルトに来てスノリの秘書役を務めたシングウェイラル修道院の神父スチュルミル(Styrmir, 1170-1245)などの寄与するところが大きいとも推定されている。いずれにしてもスノリがノルウェーからアイスランドへ帰国した1220年からその運命が傾き始める1233年頃までは、スノリの著作活動において最も多産な時期で、政治家としても多忙な生活を送る中でも余暇を見出して、倦むことなく著作に専念したのであろう。スノリは当時アイスランド随一の政治家であったと同時に、最も優れた歴史家・詩人のうちの一人であり、並大抵ではない才能を持ち合わせていた偉大な人物であったことは間違いないであろう。

II.『スノリのエッダ』におけるニーベルンゲン伝説

さて、そのようなスノリの著作の中でも 1222-25年頃に書き上げられた『散文エッダ』中に見出されるニーベルンゲン伝説を紹介するのが本稿の目的である。そのニーベルンゲン伝説は『スノリのエッダ』中の第二部「詩人の語法」第39章から第41章にかけてまとめられている。『歌謡エッダ』及び『ヴォルスンガ・サガ』とともに貴重な資料なので、ここでそのスノリのニーベルンゲン伝説をすべて訳出しておこう。訳出するにあたっては貴重なグスタフ・ネッケル／フェリクス・ニートナーの翻訳[7]を底本に用いるが、現在入手可能な現代語訳[8]

6) ボルグ屋敷の創設から書き起こして、豪勇詩人エギル・スカラグリムソンの死までを辿った作品で、スノリ自身1202年から数年間その屋敷の主人であったこともあり、最近ではこの作品がスノリの手になるものであると推定されている。(山室静：北欧文学ノート 131頁及び135頁参照)

7) Gustav Neckel/Felix Niedner (Übertragen): Die jüngere Edda. (Thule 20. Band) Eugen Diederichs in Jena 1925.

8) Karl Simrock (Übersetzt): Die Edda. Die ältere und jüngere Edda und die mythischen Erzählungen der Skalda. Phaidon Verlag Essen 1987.
Arnulf Krause (Übersetzt): Die Edda des Snorri Sturluson. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1997.

も随時参照する。なお、1）～3）の小見出しは便宜上私がつけたものであることをお断りしておく。

1）カワウソの償い――『スノリのエッダ』第39章――

黄金を「カワウソの償い」(Otterbuße)と呼ぶのは、どのような理由からであろうか？――次のように語られている。アサ神族のオーディン(Odin)、ロキ(Loki)及びヘーニル(Hǫnir)は、世界を調べるために出かけたとき、ある川に到達し、その川に沿って歩いていると、ある滝にやって来た。その滝にはカワウソがいた。カワウソは滝の中で一匹のサケをつかまえると、目を閉じたままそのサケを食べていた。そこでロキが石を拾い上げ、カワウソにめがけて投げつけると、頭に当たった。ロキは自分の狩りをほめ称えた。一つの石を投げることでカワウソとサケを射止めたからである。彼らはサケとカワウソをつかんで、持ち去った。やがてある農家に辿り着き、中に入って行った。そこに住んでいた農夫はフライトマール(Hreidmar)といった。彼は優れた男で、魔術にもよく通じていた。そこでアサ神族たちは夜の宿を願い出て、食料品なら十分に持ち合わせていると言ってから、農夫にその獲物を見せた。ところが、フライトマールはそのカワウソを見ると、息子たちのファフニール(Fafnir)とレギン(Regin)を呼び寄せて、二人の弟オッター(Otter)が打ち殺されたこと、そしてその下手人が誰であるかを教えた。今や父親と息子たちはアサ神族に近づいて、彼らをつかんで縛り上げてから、そのカワウソはフライトマールの息子であることを打ち明けた。アサ神族はフライトマール自身が要求するだけの多くの身の代金を申し出たので、そのように話がまとまり、誓いがなされた。そこでカワウソの皮が剝ぎ取られた。フライトマールはそのカワウソの皮を手に取って、言った。この皮を赤い黄金で満たし、それを黄金ですっかりと覆うのだ、それが和解であると。

そこでオーディンはロキをシュヴァルツアルベンハイム(Schwarzalbenheim)へ遣わせると、ロキはアンドヴァリ(Andwari)という名の侏儒(こびと)のところにやって来た。侏儒は魚となって川の中で暮らしていた。そこでロキは彼をつかまえて、身の代金として岩の中に横たえているすべての黄金を要求した。こうして彼らが岩の中に入って行くと、侏儒は所有していたすべての黄金を引きずり出した。それは膨大な財宝であった。侏儒は一つの小さな指環を袖の中に隠した。それをロキが見て、指環を渡すように命じた。侏儒は指環を取り上げないでほしいと頼んだ。それを持っておれば、それでもって財宝を増やすことが

できるというのである。ロキは少しでも手元に残してはならぬと答えて、指環を取り上げ、出て行った。そこで侏儒は言った、この指環を所有する者には死をもたらすようにしてやると。ロキが答えて言うには、それで結構だ、その呪いは実現するがよかろう、この指環を次に所有することになっている者に、そのことを聞かせておこうということであった。

彼は立ち去り、フライトマールのもとに戻って、オーディンにその黄金を見せた。オーディンはその指環を目にすると、すばらしいものに思われたので、それを財宝の中から取り上げて、残りの黄金をフライトマールに引き渡した。そこでこの男はカワウソの皮に黄金を詰め込んで、それをしっかりと立てた。そのあとオーディンが近寄って、そのカワウソの皮を黄金でもって覆い隠し、フライトマールに向かって、その皮がすっかりと覆い尽くされたか調べてほしいと言った。フライトマールがよく調べて見ると、一本の髭があることに気づいて、それをも覆い隠すようにと言った。さもなければ和解などはないというのである。そこでオーディンは指環を取り出して、それで髭を覆い隠してから、言った。これで今こそカワウソの償いから免れたぞと。

こうしてオーディンは槍を手に取り、ロキは靴をはき、もはや何も恐れるものはなくなると、ロキは言った。「この指環とこの黄金を所有する者には死がもたらされるとアンドヴァリが言ったことは実現するだろう」そしてこのことはその後実際に実現したのである。――こうして今や、黄金がなぜ「カワウソの償い」(Otterbuße)または「アサ神族の償い」(Notbuße der Asen)あるいは「喧嘩の鉱石」(Zankerz)と呼ばれているか、その理由が語り尽くされて明らかとなったのである。

2）ファフニールの黄金――『スノリのエッダ』第40章――

その黄金についてそのほかにどのようなことが語られうるであろうか？――フライトマールはその黄金を息子の代償として受け取ったが、ファフニールとレギンはその一部を兄弟の代償として要求した。しかしフライトマールは彼らに少しの黄金も与えなかった。そこで兄弟はよからぬ計画を企て、その黄金を手に入れるために、父親を打ち殺してしまった。レギンは今やファフニールに、その黄金を半分ずつ分配してほしいと要求した。ところがファフニールは、黄金のために自分が父親を殺したのだから、弟に黄金の一部を分け与えるつもりはまったくないと答え、レギンにここから立ち去るよう勧め、さもなければお前もフライトマールのようになるぞと言った。ファフニールはフライトマール

が所有していた兜を手に取り、それを頭に被せた。それは「恐怖の兜」(Schreckenhelm)と呼ばれているもので、それを目にすると、すべての生き物は震えあがるという兜であった。彼はまたフロッティ(Hrotti)という名の剣をも手に入れた。レギンはレフィル(Refil)という名の剣を持っていた。彼はそこから逃げ去った。ファフニールはグニタハイデ(Gnitaheide)に登って行き、一つの洞穴を掘って、竜の姿に変身して、その黄金の上にすわり込んだ。

そうしているうちにレギンはティ(Ty)[9]のヒィアルプレーク王(Hjalprek)のところへ行って、彼の鍛冶屋となった。そこで彼は養父として、ヴェルズング(Wålsung)の息子ジークムント(Sigmund)とエイリミ王(Eylimi)の娘ヒョルディース(Hjårdis)の間に生まれた息子ジグルト(Sigurd)を育てた。ジグルトは血統と力と勇気の点でありとあらゆる軍隊王の中でも最も有名な王となった。レギンは彼に、黄金の上に横たわっているファフニールについて語り、その黄金をかち得るように彼を掻き立てた。そこでレギンは剣グラム(Gram)を鍛え上げた。その剣はとても鋭かったので、ジグルトがそれを流れている川に浸すと、その刃に向かって流れてきたひとつかみの羊毛がそれにあたって切れたほどであった。そのあとジグルトはその剣でもってレギンの金敷を、木の土台に達するまで、真っ二つに切り裂いた。今やジグルトとレギンはグニタハイデに登った。そしてジグルトはファフニールの通る道の上に一つの穴を掘って、その中に身を潜めた。そしてファフニールが水のところまで這い出し、その穴の上を通りかかったとき、ジグルトは剣を相手の身体に突き刺すと、それが相手の最期となった。レギンは近寄ってきて、ジグルトに自分の兄を殺したことを咎めた。その償いとして彼はジグルトに、ファフニールの心臓を切り取って、火であぶるように命じた。レギン自身は身をかがめ、ファフニールの血を飲むと、それから横になって眠ってしまった。

ジグルトはその心臓をあぶり、すっかり焼けたと思って、指でもってその柔らかさを調べようとしたが、その心臓から出る泡が彼の指に流れてきて、火傷をしてしまい、指を口の中に入れた。すると心臓の血が舌に触れて、彼は鳥の声が理解できるようになり、シジュウカラが木にとまって歌っているのを聞いた。その一羽が次のように歌った。

１５１

あそこにジグルトがすわっている。

9）ユトラント半島の地方名。

血がぽたぽたしたたる、
ファフニールの心臓を
彼は火であぶっている。
指環の破壊者は、
そのキラキラ光る
生き物の肉を食べたら、
とても賢くなれるのに。

１５２

そこにレギンが横たわって（別の鳥が歌った）、
もくろんでいる。
彼を信用している男を、
彼は欺こうとしている。
よからぬ陰謀を
彼は陰気に考えている。
企む鍛冶屋は
兄の復讐をしようとしている。

そこでジグルトはレギンに近づいて、彼を殺した。それからジグルトは馬グラニ(Grani)のところへ行って、それに乗ってファフニールの洞穴まで行き、黄金を運び出して、それを紐でくくって積み荷とすると、それをグラニの背中に乗せ、自らも飛び乗って、それから道を進んで行った。――その黄金がなぜ「ファフニールの洞穴あるいは住家」(Fafnirs Höhle oder Bau)、「グニタハイデの鉱石」(das Erz der Gnitaheide)あるいは「グラニの重い荷物」(Granis Bürde)と呼ばれるのか、今や語り尽くされたのである。

3）ニーベルンゲン族――『スノリのエッダ』第41章――

ジグルトは馬を進めて行くと、山の上に一つの館を見つけた。その中には一人の女性が眠っており、女性は兜と鎧を身につけていた。彼は剣を抜き、鎧を切り裂いて彼女の身体からはずした。すると彼女は目覚め、自らを戦乙女だと言った。彼女はブリュンヒルト(Brynhild)と呼ばれ、ヴァルキューレ(Walkyrje)であった。

ジグルトはそこを去って、ギューキ(Gjuki)という名の国王のところに来た。

その妃はグリームヒルト(Grimhild)といった。彼らの子供がグンナル(Gunnar)、ヘグニ(Högni)、グートルーン(Gudrun)、グートニィ(Gudny)であった。ゴットルム(Gottorm)はギューキ王の継子であった。そこにジグルトはしばらくの間滞在した。彼はギューキ王の娘グートルーンと結婚した。そしてグンナルとヘグニは彼と兄弟の契りを誓い合った。そのあとジグルトとギューキの息子たちは出かけて行った。グンナルがブドリ(Budli)の息子アトリ(Atli)のところで一人の女性、すなわちアトリの妹ブリュンヒルト(Brynhild)に求婚するためであった。彼女はヒンダベルク(Hindaberg)の上に住んでいた。彼女の館のまわりには炎が燃え上がっていた。そして彼女は、その炎を越えてやって来る勇気のある者だけを夫にするという誓いを立てていた。今やジグルトとギューキ一族の者たち――彼らはニーベルンゲン族(Nibelunge)とも呼ばれた――はその山に馬で登り、グンナルがその炎を飛び越えることになっていた。彼は雄馬ゴティ(Goti)に乗ったが、その馬は炎の中に飛び込んで行こうとしなかった。そこでジグルトとグンナルは姿と名前をも交換した。というのも、グラニはジグルト以外の騎手を乗せることはしなかったからである。ジグルトはグラニの背中に飛び乗って、炎の中を通り抜けた。その夜に彼はブリュンヒルトと婚礼の儀を執り行った。しかし二人がベッドに入ったとき、彼は剣グラムを鞘から抜いて、それを二人の間に置いた。そして朝、起きて衣服を身につけると、彼はブリュンヒルトに後朝(きぬぎぬ)の贈り物として黄金の指環――それはロキが侏儒アンドヴァリから奪い取ったものであった――を贈り、彼女の手から別の指環を思い出の品として抜き取った。それからジグルトは馬に飛び乗って、連れの者たちのところに戻った。彼とグンナルは再び姿を交換して、ブリュンヒルトを連れてギューキ王のもとに帰って行った。ジグルトはグートルーンとの間に二人の子供ジークムント(Sigmund)とスヴァンヒルト(Swanhild)を儲けた。

ある日、ブリュンヒルトとグートルーンは、髪を洗うために川へ出かけて行った。彼女らは川にやって来ると、ブリュンヒルトが陸から川の中に入って行って、自分はグートルーンの髪を洗った水で頭を洗いたくないと言った。自分の方がより勇敢な夫を持っているからというのである。そこでグートルーンは彼女のあとから川の中に入ったが、自分こそこの世でグンナルも他のいかなる男も勇気において比べものにならないほどの夫を持っているのだから、自分の髪を川の上流で洗うべきだと言った。というのも、夫はファフニールとレギンを打ち殺し、二人の遺産をもかち取ったからというのである。そこでブリュンヒルトは答えて言った。「グンナルが炎を飛び越えたのであって、ジグルトがそうしたのではありません」そこでグートルーンは笑って言った。「あなたはグン

ナルが炎を飛び越えたと思っているの？この指環を私に贈ってくれた男の人が、あなたと一緒にベッドに入ったのだと私は思うわ。でもあなたが手にはめていて、後朝(きぬぎぬ)の贈り物としてもらったその指環は、アンドヴァリの贈り物(Andwarinaut)と呼ばれているけど、それをグニタハイデで手に入れたのはグンナルではないと私は思っているわ」そこでブリュンヒルトは黙り込んで、館に帰って行った。

そのあと彼女はグンナルとヘグニに、ジグルトを殺害するようにとけしかけた。しかし彼らはジグルトと誓いを交わした兄弟だったので、二人はその弟ゴットルムにジグルトを殺害するようにけしかけた。するとこの男はジグルトが眠っているところを剣で突き刺した。しかしジグルトは傷を受けたのを感じると、剣グラムを殺害者に後ろから投げつけたので、剣はその者の真ん中に突き刺さった。ジグルトは倒れ、ジークムントという名の彼の息子もまた彼らに殺害されたのであった。

ブリュンヒルトはそのあと剣でもって自らの身をも突き刺し、ジグルトと一緒に焼かれた。グンナルとヘグニはファフニールの遺産とアンドヴァリの贈り物を自分たちのものとし、そして今や国々を支配したのであった。

ブドリの息子で、ブリュンヒルトの兄であるアトリ王は、ジグルトの未亡人グートルーンと結婚した。そして彼らは子供を儲けた。アトリ王はグンナルとヘグニを自分のところに招待したところ、彼らはその招待に応じた。しかし彼らは故郷を出発する前に、ファフニールの遺産の黄金をライン河に沈めてしまった。そしてこの黄金はその後二度と誰にも見つけ出されることはなかったのである。アトリ王は武装した従者たちを準備しており、従者たちはグンナルとヘグニと戦ったので、この二人は捕らえられてしまった。アトリはヘグニの生きている身体から心臓を切り取らせたので、ヘグニは死んでしまった。そしてグンナルの方は蛇の牢屋に閉じ込めさせた。グンナルにはしかし密かに竪琴が差し出された。すると彼は両手は縛られていたので、足指でそれを奏でたのであった。彼はその竪琴を奏でて、すべての蛇を眠らせてしまったのであったが、一匹の毒蛇だけは彼のところに這ってきて、胸骨の下の軟骨にかみついたので、その頭を体内に差し込むことができ、肝臓にしがみつくと、グンナルは死んでしまった。――グンナルとヘグニはニーベルンゲン族ともギューキ族とも呼ばれている。そのためその黄金は「ニーベルンゲンの財宝」(der Nibelunge Schatz)あるいは「その遺産」(-Erbe)とも呼ばれているのである。

そのあとすぐにグートルーンは彼女の二人の息子を殺し、その頭蓋骨から金と銀をちりばめた杯を作らせた。それからニーベルンゲン族を弔う儀式を催さ

せた。この宴の席でグートルーンはアトリ王にその杯からはちみつ酒をつがせたが、そのはちみつ酒には子供たちの血が混ぜられていたのである。子供たちの心臓の方はあぶらせて、国王の食事に差し出させたのであった。これが行われると、彼女は彼に多くの激しい言葉を吐きながらすべてのことを話した。飲み物がたっぷりと出されていたので、たいていの人々は座っていたところで眠り込んでしまった。この夜にグートルーンは眠っている国王のもとへ行った。ヘグニの息子も彼女と一緒であった。こうして二人は国王を打ちのめすと、それが彼の最期となったのである。それから二人は館に火をつけたので、その中にいた人々は焼き尽くされたのであった。

グートルーンは海岸に行き、海の中に飛び込んだ。彼女は溺れ死んでしまおうと思ったのである。ところが、彼女はフィヨルドを越えて押し流されて、ヨーナクル王(Jonakr)の国に流れ着いた。国王が彼女を見ると、彼女を自分のものとして、彼女と結婚した。二人は三人の息子を儲け、子供たちの名前はセルリ(Sørli)、ハムディル(Hamdir)、エルプ(Erp)といった。子供たちは皆、グンナルやヘグニ、その他のニーベルンゲン族と同じように、カラスのように黒い髪の毛をしていた。

そこで若きジグルトの娘スヴァンヒルトも成長した。彼女はとてもすばらしい娘となった。そのことを権勢豊かなヨルムンレク王(Jørmunrek)が聞いた。彼は彼女に求婚するため、自分の息子ラントヴェール(Randwer)を使者として遣わせた。息子がヨーナクルのところに着くと、スヴァンヒルトは彼に委ねられて、息子は彼女をヨルムンレク王のもとに連れて行くことになっていた。ところがビッキ(Bikki)は、ラントヴェールとスヴァルヒルトは若いが、ヨルムンレクは年老いているので、ラントヴェールがスヴァルヒルトを妻に迎えた方がよい、と言った。この提案は若い二人によく気に入った。そしてすぐにビッキはこのことを国王に言いつけたのである。

そこでヨルムンレク王は自分の息子を捕らえて、絞首台へ連れて行かせた。ラントヴェールは鷹を手に取って、その羽根を抜き取ってしまってから、それを父のところに届けさせた。そのあと彼は吊された。ヨルムンレク王はその鷹を見ると、ちょうどその鷹が羽根なしで飛べないと同じように、年老いて息子もいない自分の王権も活気なく落ちぶれていることを悟った。今やヨルムンレク王は森での狩りから帰って来てスヴァンヒルトを見た。彼女はそこにすわり、髪をさらしていた。そこで彼らは彼女に向かって馬を駆けさせて、馬のひづめで踏みつけて殺してしまった。

グートルーンはこのことを聞き知ると、息子たちにスヴァンヒルトの復讐を

するようにけしかけた。そして彼らが出発の準備をしているとき、彼女は彼らに鎧と兜を与えたが、それらはとても丈夫だったので、どんな鉄も通さないほどであった。彼女が彼らに忠告して言うには、ヨルムンレク王のところに着いたら、夜に王が寝ているときに襲うことにして、セルリとハムディルが王の手と足を切り落とし、エルプが王の頭を切り落とすがいいということであった。

こうして彼らが旅の途上にあったとき、二人はエルプに向かって、ヨルムンレク王に立ち向かうとき、どのような援助をしてくれるのかと尋ねた。彼は、手が足を助けるように、手助けすると答えた。二人は、足が手で支えられるなんて馬鹿げたことだと言った。彼らは母親にとても怒りを覚えていた。なぜなら、母親は敵対的な言葉でもって彼らを送り出したからである。そこで彼らは母に逆らうようなことをしようと思って、エルプを打ち殺してしまった。というのも、母は彼を最も愛していたからである。そのあとすぐにセルリは歩いているときに片足を滑らせてしまい、手で身体を支えた。そこで彼は言った。「今や手が足を助けた。エルプが生きていたら、よかったのだが」

こうして彼らは夜にヨルムンレク王が寝ている部屋に入って行って、王の手と足を切り落とそうとすると、王は目覚めて、部下に叫んで、起きるよう命じた。そこでハムディルは言った。「エルプが生きていたら、今や王の頭は落ちていたのだが！」そこで家来たちが起き上がって、二人に襲いかかったが、武器では何も成し遂げることはできなかった。ヨルムンレクは二人に石を投げつけるように叫んだ。その通りのことが行われると、セルリとハムディルは倒れ死んでしまった。ギューキの一族と子孫はすべて死に絶えてしまったのである。

若きジグルトはアスラウグ(Aslaug)という名の娘をあとに残した。彼女はフリムダル(Hlymdal)のハイミル(Heimir)のもとで成長した。高貴な子孫は彼女に由来するのである。

ヴェルズングの息子ジークムントはとても強かったので、毒を飲んでも何の害も被らなかったと語られている。それに対して彼の息子たちシンフィエトリ(Sinfjötli)とジグルトはとても固い皮膚をしていたので、裸でいるところを外部から毒が襲っても、彼らは何の害も被らなかった。だからスカルド詩人のブラギ(Bragi)[10]は次のように表現することができたのである。

---

10) 9世紀初期のノルウェーの詩人。詩の残る最初の北欧詩人とされる。(山室静：北欧文学の世界 70頁参照)

１５３
年老いた巨人族を
打ち倒した者（トール）の釣り針に
ヴェルズングの飲み物（毒）を持った、
身をうねらせるウナギ（ミットガルトの蛇）がかかった。

この伝説は、断片的であるが、とても多くのスカルド詩人においても取り扱われてきた。老ブラギはハムディルとセルリの死をラグナル・ロートブロク(Ragnar Lodbrok)の詩の中でこう表現した。

１５４
さらに、ヨルムンレクは
剣の雑踏の中で
悲しい夢から目覚めた。軍勢も皆、
血の中に浸っていた！
気高いラントヴェールの父（ヨルムンレク）の
館で戦いが起こった。
エルプの兄弟たちが、黒い武装をして
ひどい悲しみの復讐を遂げたのである。

１５５
倒れた戦士（ヨルムンレク）の朝露（血）が
椅子を伝わって広間の床に流れ落ちた。
見よ、足は切り離され、
手は切り落とされている！
半分血の混ざった酒の中に
頭を入れたまま、彼は倒れている。
レイフィ（海王）国の戦士の楯に
これらすべてのことが描かれている。

１５６
ナグルファルの楯を手に持つ、
釘を抜かれた柱（戦士たち）が皆、
ここの寝室のベッドに横たわる

国王のまわりに立っていた。
ヘルガウト（オーディン）夫人（大地）の
堅い石でもって、敵は憎しみをこめて、
そこのハムディルとセルリを
打ち倒すように命じた。

１５７
戦いの戦士（ヨルムンレク王）は、
スヴァンヒルトの夫（ヨルムンレク王）の命を
奪おうとしたギューキ一族の英雄たちめがけて、
石を投げさせて殺してしまった。
鎧の白樺（剣）の
きらめく路地（傷）――剣の傷を負わせて、
皆はヨーナクルの一族（ハムディルとセルリ）に
復讐を成し遂げたのであった。

１５８
多くの戦士たちが倒れた有様の絵を
私はきらめく楯の上に見つけた。
あらゆる伝説が描き込まれたレール王の船の
月（楯）をラグナルが私に贈ってくれたのである。

III. スノリにおけるニーベルンゲン伝説の特質

拙訳によって『スノリのエッダ』におけるニーベルンゲン伝説を紹介してきたが、ここで北欧における『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』あるいはドイツにおけるニーベルンゲン伝説との比較においてスノリの特質をまとめることにしよう。

1）カワウソの償い――『スノリのエッダ』第39章――

スノリの特質はまずその叙述の主眼が当時スカルド詩人たちの間で流行していた特殊な語法「ケンニング」の説明にあるということであろう。第39章においては黄金をなぜ「カワウソの償い」と呼ぶのか、その経緯を一つの物語に仕

立てて説明している。そこで語られている内容は『歌謡エッダ』中の「レギンの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第14章[11]のそれとほぼ同じであるが、もちろん若干異なるところもある。例えば、その二作品では身代金として黄金を調達するためにロキはまず最初に海の女神ラーンを訪ねて、彼女の網を手に入れてからアンドヴァリフォルスへ出かけるのであるが、スノリにおいては海の女神ラーンの記述は見出されず、侏儒アンドヴァリをどのようにして捕まえたのかについては明らかにされていない。また侏儒アンドヴァリが魚に姿を変えて住んでいた場所についてもアンドヴァリフォルスではなく、シュヴァルツアルベンハイムという名称が用いられている。しかし、このスノリの第39章でとりわけ目立っているのは、アンドヴァリが黄金を奪い取られた恨みから「その黄金を所有する者は誰でもそのために死ぬことになる」という呪いをかけた際に、ロキが「それで結構だ、その呪いは実現するがよかろう、この指環を次に所有する者に伝えておこう」と答えている点[12]であろう。やがてその黄金をすべてフライトマールに手渡してしまったオーディンも、特にスノリの作品では「これで今や我々はカワウソの償いから免れたぞ」という安堵の言葉を口にしている。スノリは、要するに、オーディンとロキとヘーニルの三神がアンドヴァリの呪いを恐れる必要がなくなったことを明らかにしているのである。

2）ファフニールの黄金――『スノリのエッダ』第40章――

スノリはこうして黄金をなぜ「カワウソの償い」または「アサ神族の償い」あるいは「喧嘩の鉱石」と呼ぶのか、その経緯を前章で明らかにしたのであるが、その黄金の呪いが実際にどのように実現されたのかについては、続く第40章の冒頭で詳しく語っている。ファフニールが父フライトマールを殺害したあと、竜の姿で黄金を独り占めにしている点では、『歌謡エッダ』中の「レギンの

11) 谷口幸男訳：エッダ――古代北欧歌謡集――新潮社1973年 133-4頁及び菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説――ヴォルスンガ・サガ―― 東海大学出版会1979年 40-2頁参照。

12) 『歌謡エッダ』中の「レギンの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第14章では確かにロキはそののち黄金をフライトマールに渡した際にその呪いの言葉を伝えているが、しかし、この場面ではロキは何も答えていない。(谷口幸男訳：前掲書 134頁及び菅原邦城訳：前掲書 42頁参照)

歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第14章の叙述[13]とほぼ同じであるが、スノリにおいてはすでにこの場面で、それを目にしたすべての生き物は震え上がるという「恐怖の兜」、ファフニールが手に入れた剣フロッティ、そしてレギンの剣レフィルについても言及されている。「恐怖の兜」については『歌謡エッダ』中の「レギンの歌」ではすでにこの場面[14]で言及されているものの、『ヴォルスンガ・サガ』においてはずっとあとの第18章でシグルズがファーヴニルを退治する前に交わす会話[15]、並びに第20章でシグルズがファーヴニルの洞窟の中でそれを見つけたとき[16]にようやく言及されているのである。また剣フロッティにしても『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第20章でファーヴニルの洞窟の中で初めて見つけられる[17]のであり、さらにレギンの剣レフィルにしても『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第19章においてシグルズが倒した竜の心臓を切り取る際[18]に初めて記述されているのである。このように記述の箇所は異なっているが、とにかくそれらの名称を伝える資料がスノリの手元にあったことは確かであると言ってもよいであろう。

ファフニールが黄金を独り占めにしたエピソードを記述したあと、スノリはレギンがヒィアルプレーク王のもとで鍛冶屋となってジグルトを養育し、ファフニールの黄金を獲得するようにジグルトを唆したことを語っており、それらの大筋は『歌謡エッダ』中の「レギンの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第13-15章[19]とほぼ同じであるが、ジグルトの出自についてはごく簡単に「ジークムントとヒョルディースの間に生まれた息子」と記述してあるだけであり、その両親の物語に関して『ヴォルスンガ・サガ』第11-12章において語られているよ

13) 谷口幸男訳：前掲書 134-5頁及び菅原邦城訳：前掲書 42-3頁参照。(ただし、前者ではフレイズマルの娘たちとしてリュングヘイズとロヴンヘイズも登場している)
14) 谷口幸男訳：前掲書 135頁参照。(なお、この「恐怖の兜」は『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」においてシグルズがファーヴニルと戦う前に交わす会話、及びシグルズがファーヴニルの洞穴でそれを見つけたときにも言及されている。谷口幸男訳：前掲書 139頁及び 142頁参照)
15) 菅原邦城訳：前掲書 51頁参照。
16) 菅原邦城訳：前掲書 57頁参照。
17) 谷口幸男訳：前掲書 142頁及び菅原邦城訳：前掲書 57頁参照。
18) 谷口幸男訳：前掲書 140頁及び菅原邦城訳：前掲書 56頁参照。
19) 谷口幸男訳：前掲書 133-7頁及び菅原邦城訳：前掲書 36-45頁参照。

うな詳しい叙述[20]は見出されない。名剣グラムに関しても、ただレギンがそれを鍛え上げたと簡単に説明してあるだけで、『ヴォルスンガ・サガ』第15章において取り扱われているその剣の破片についてのエピソード[21]は明らかにされていない。その名剣グラムでもってジグルトがやがて成し遂げる竜退治に関しても、ジグルトは一つの穴を掘って、その中に身を潜めて、ファフニールがその上を這っているときに剣を突き刺して退治したことを伝える簡単な記述があるだけで、『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第18章におけるような詳細な叙述[22]は見出されない。しかもこの竜退治には『ヴォルスンガ・サガ』においてのようにはまだオーディンは関与していない。

竜を退治したジグルトは、そのあとレギンの要求に従って竜の心臓を焼いた際に、火傷をしたために心臓の血が舌に触れて、鳥の声が理解できるようになり、その忠告によりレギンを殺してしまうが、その辺の事情は『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第19-20章[23]とほぼ同じである。またその鳥の声はスノリにおいては2連の歌謡で引用されており、それらは『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」[24]とほぼ同じ内容であり、貴重な資料であると言える。しかし、『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第20章において鳥の声に関するエピソードの中で言及されているヒルダルヒィアルのシグルドリーヴァあるいはブリュンヒルドについての叙述[25]はスノリでは見出されない。ジグルトはこうしてその鳥の声に従ってファフニールの洞穴に入って行き、そこで黄金を見つけて、それを馬グラニに積んで運び去るのである。『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第20章[26]と同じ展開である。このようにスノリはこの第40章においては黄金が「ファフニールの洞穴あるいは住家」、「グニタハイデの

---

20) 菅原邦城訳：前掲書 29-35頁参照。(この両親については『歌謡エッダ』では散文で書かれた「シンフィエトリの死について」の中でごく簡単に記述されているだけである。谷口幸男訳：前掲書 126頁参照)

21) 菅原邦城訳：前掲書 43-5頁参照。(この名剣グラムは『歌謡エッダ』では「レギンの歌」でごく簡単に記述されているだけで、レギンがそれを鍛え上げるエピソードは語られていない。谷口幸男訳：前掲書 135頁参照)

22) 谷口幸男訳：前掲書 138-40頁及び菅原邦城訳：前掲書 49-54頁参照。

23) 谷口幸男訳：前掲書 140-2頁及び菅原邦城訳：前掲書 55-7頁参照。

24) 谷口幸男訳：前掲書 141頁参照。

25) 谷口幸男訳：前掲書 142頁及び菅原邦城訳：前掲書 57頁参照。

26) 谷口幸男訳：前掲書 142頁及び菅原邦城訳：前掲書 57-8頁参照。

鉱石」あるいは「グラニの重い荷物」と呼ばれるに至った経緯を物語にして語っており、スノリの身辺にはこれらの資料が数多く存在していたことを窺わせるのである。

3）ニーベルンゲン族――『スノリのエッダ』第41章――

続く第41章でスノリはその黄金をなぜ「ニーベルンゲン族の財宝」あるいは「その遺産」と呼ぶのか、そのケンニングの説明のためにニーベルンゲン族の物語を展開させている。

ニーベルンゲン族とは、ドイツの伝承では、そもそも黄金を所有していた侏儒一族を指し、その後その呪いをかけられた黄金を手にする一族すべてを指す名称である[27]が、スノリがこの詩学書の中でまずはっきりとニーベルンゲン族と呼んでいるのはギューキ一族のことである。このギューキ王の国がどこに位置しているかについては記述されていないが、『ヴォルスンガ・サガ』第26章[28]と同じように南のライン河畔が意識されていたことはまず間違いあるまい。ただギューキ王とその王妃グリームヒルトの間に生まれた子供たちが、『ヴォルスンガ・サガ』第26章[29]ではグンナル、ホグニ、グットルムの三人息子と一人娘グズルーンとなっているのに対して、『スノリのエッダ』ではグンナル、ヘグニ、グートルーンのほかに新たにグートニィという人物が加えられており、さらにゴットルムはギューキ王の継子であったとされている。このグートニィがいかなる人物であり、またゴットルムがどういう母親から生まれたのかについては、詳細は分からない。さらにギューキ王の妃グリームヒルトについても、『ヴォルスンガ・サガ』第26章[30]のように彼女が邪な魔法使いであったという記

27) 例えば、『ニーベルンゲンの歌』では、ニーベルンゲン族とは初めはこの財宝の所有者である侏儒一族(87-99; 484-507)を、次にはこの財宝を奪ったジーフリトの一族(778; 1003; 1011; 1058; 1071; 1095)を、最後にはこれをクリエムヒルトから取り上げたブルゴント族(1523; 1526; 1527; 1715; 1726; 1737; 1870)を指している。

28) 菅原邦城訳：前掲書 75頁参照。(『歌謡エッダ』においても「シグルズの歌」断片でシグルズはライン河の南で殺害されたと語られていることから、ギューキ一族の国はライン河畔にあったと考えてよいであろう。谷口幸男訳：前掲書 150頁参照)

29) 菅原邦城訳：前掲書 75頁参照。(『歌謡エッダ』中の「シグルズの歌」断片ではその辺の事情を伝える明確な記述は欠落している)

30) 菅原邦城訳：前掲書 76頁参照。(『歌謡エッダ』中の「グリーピルの予言」ではグリームヒルドがシグルズを騙し、その暗殺も彼女の所為とされているが、はっきりと彼女が邪悪な女性であったとは記されていない)

述もなく、従ってジグルトはこの王妃から忘れ薬を飲まされることもない。ジグルトはしばらくそこに滞在して、グートルーンと結婚したとあるだけである。ジグルトがグンナル及びヘグニと兄弟の契りを誓い合ったあと、グンナルがアトリの妹ブリュンヒルト[31]に求婚することになったのも、王妃グリームヒルトの勧めによるものであるとの記述は見出されない。スノリは物語をごく表面的に展開させているだけである。ジグルトがグンナルと姿を交換して、グラニに乗って炎を飛び越えてブリュンヒルトのもとに行き、彼女をグンナルの妻として連れ帰る件(くだり)についても、表面的であるが、ほぼ『ヴォルスンガ・サガ』第29章[32]と同じである。

その後、川の中で展開されるブリュンヒルトとグートルーンの口論についても、またそれがきっかけとなってジグルトが眠っているところをゴットルムに暗殺され、ブリュンヒルトも自刃して一緒に焼かれることになる件(くだり)も、表面的な展開ながら『ヴォルスンガ・サガ』第30-33章[33]とほとんど異なるところはない。ただスノリではジグルトとともにその息子ジークムントも殺害されたことになっている点[34]で若干の相違を見せている。

ジグルトを失ったグートルーンは、やがてブリュンヒルトの兄アトリと再婚し、アトリによって招待された彼女の兄弟グンナルとヘグニが殺害される展開も、表面的ながら『歌謡エッダ』中の「グリーンランドのアトリの歌」と「グリーンランドのアトリの詩」及び『ヴォルスンガ・サガ』第34-39章[35]とほぼ同

---

31) スノリは第41章冒頭でヴァルキューレのブリュンヒルトについて記述しているが、あとに登場するこのアトリの妹ブリュンヒルトと同一人物なのか否かについては、あいまいなままにしている。

32) 菅原邦城訳：前掲書 84-8頁参照。(『歌謡エッダ』では「グリーピルの予言」でグンナルとの姿交換がごく簡単に語られているだけで、そのほかのことについては語られていない。谷口幸男訳：前掲書 130-1頁参照)

33) 菅原邦城訳：前掲書 89-111頁参照。(両王妃口論については『歌謡エッダ』では語られていない。またシグルズの暗殺については『歌謡エッダ』中の「シグルズの歌」断片において断片的に伝えられており、さらに「シグルズの短い歌」でも語られているが、後者ではブリュンヒルトの嫉妬から暗殺が行われることになっており、内容が若干異なっている。谷口幸男訳：前掲書 149-151頁及び 154-161頁参照)

34) 『ヴォルスンガ・サガ』第33章ではシグルズの息子が殺害される記述はないが、しかし、シグルズの遺体を焼く際には息子の遺体も一緒に焼かれることになっている。菅原邦城訳：前掲書 111頁参照。

35) 谷口幸男訳：前掲書 175-92頁及び菅原邦城訳：前掲書 112-30頁参照。

様である。ただ若干の相違は、グンナルの死に関して『ヴォルスンガ・サガ』では毒蛇が彼の身体の中に喰い入って心臓に噛みつくのに対して、スノリでは毒蛇がグンナルの胸骨の下の軟骨に噛みついて、体内に頭を差し込んで、肝臓にしがみついたという点である。ちなみに、『歌謡エッダ』中の「グリーンランドのアトリの歌」と「グリーンランドのアトリの詩」ではグンナルが蛇牢に入れられて竪琴を奏でたところまで語られているが、そのあと身体のどこを噛みつかれて死んだのかについては不明である。ただ『歌謡エッダ』中の散文で書かれた「ニヴルング族の殺戮」ではグンナルは蛇牢で肝臓を噛まれたことになっている[36]。いずれにせよ、こうしてアトリの国で最期を遂げたグンナルとヘグニをスノリはギューキ一族という呼び方のほかに、ニーベルンゲン族とも呼んでおり、そのため災いをもたらすその黄金を「ニーベルンゲン族の財宝」あるいは「その遺産」と呼んでいるのである。

兄弟を殺害されたグートルーンは、そのあとすぐにアトリとの間の二人の息子を殺し、さらにはアトリ自身をも殺して兄弟たちの復讐を遂げるのであるが、その辺の事情も『歌謡エッダ』中の「グリーンランドのアトリの歌」と「グリーンランドのアトリの詩」及び『ヴォルスンガ・サガ』第40章[37]とほぼ同じ展開である。しかもグズルーンが眠っているアトリ王を殺害したときに、スノリではヘグニの息子も一緒であったと記述されている。この場面でヘグニの息子が登場するというこの唐突な記述は、『歌謡エッダ』中の「グリーンランドのアトリの詩」及び『ヴォルスンガ・サガ』第40章にも読み取られ[38]、スノリの手元にはこれらと共通の素材があったことを窺わせるものであり、貴重な記述であると言ってもよいであろう。

スノリはそのあとニーベルンゲン族の末裔について、その物語を展開させている。まず海で溺れ死ぬこともできなかったグートルーンは、『歌謡エッダ』中の「グリーンランドのアトリの詩」及び『ヴォルスンガ・サガ』第41章の記述[39]とほぼ同じように、ヨーナクル王の国に辿り着いて彼と結婚して三人の息子を儲けるが、その息子セルリ、ハムディル、エルプも、グンナルやヘグニのニーベルンゲン族と同じように、カラスのように黒い髪の毛をしていたとスノリは記述している。この三人兄弟が異父姉妹スヴァンヒルトの復讐をしようとする

36) 谷口幸男訳：前掲書 164頁参照。
37) 谷口幸男訳：前掲書 175-92頁及び菅原邦城訳：前掲書 112-30頁参照。
38)『歌謡エッダ』中の「グリーンランドのアトリの歌」ではその記述は見出されない。
39) 谷口幸男訳：前掲書 191-2頁及び菅原邦城訳：前掲書 136頁参照。

が、エルプは兄弟に殺され、セルリとハムディルはヨルムンレク王の命令によって石を投げつけられて殺害されるエピソードも、『歌謡エッダ』中の「ハムディルの歌」及び『ヴォルスンガ・サガ』第42-4章[40]とほぼ同じである。若干の相違といえば、「ハムディルの歌」と『ヴォルスンガ・サガ』ではセルリとハムディルが弟のエルプを殺す理由が明確にされていないのに対して、スノリでははっきりと彼らは母親に怒りを覚えており、母親に逆らうようなことをしようと思って、母親が最も愛していたエルプを打ち殺したのだと説明されている。そしてこのセルリとハムディルがヨルムンレク王によって殺害されることに関してスノリはここで5篇の歌謡を付け加えているが、それらの5篇の歌謡においてはケンニングが多用されていて、トールの釣り針にウナギがかかったという断片の歌謡とともに貴重な資料である。

以上のように見てくると、『スノリのエッダ』におけるニーベルンゲン伝説は『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』の伝承とは若干の相違を示してはいるものの、大筋ではほぼ同様の展開を示しており、それらと密接に関係していることが容易に理解されよう。ただスノリの叙述の目的は文学的展開ではなく、ケンニングの説明にあり、そのために物語の展開が表面的で粗雑であることは否めない。しかし、表面的な展開であれ、当時までの古い歌謡を引用し、かつケンニングを説明しながらニーベルンゲン伝承を伝えている点では『スノリのエッダ』は計り知れないほど大きな価値がある。『歌謡エッダ』の写本、いわゆる「王の写本」が1270年頃に書写され、『ヴォルスンガ・サガ』が1260年頃に散文としてまとめられる以前にあって、『スノリのエッダ』はこれらと共通のニーベルンゲン伝説を伝える歌謡が1222-25年頃にはスノリの周辺に数多く存在していたことを窺わせる貴重な資料であると言えるのである。

40) 谷口幸男訳：前掲書 195-8頁及び菅原邦城訳：前掲書 136-42頁参照。